

口頭発表「ウサギ大好き、東っ子」

梅木 孝彦



はじめに

本校は、群馬県高崎市の高崎駅徒歩10分ほどのところにある児童数158名の小規模校である。城下町の東に位置し、校区の中心を中山道が通り、老舗の商店街や倉づくりの建物や寺院が多く見られる。最近は駅周辺の都市整備が進み、多くの児童が高層マンションから通学している。

I ウサギの校舎内飼育の実践

1 本校の特色ある教育

(1) 生活科や道徳の授業に関連したウサギの教室飼育

1年生1学級と2年生2学級の3学級の教室でウサギを飼っている。夏に生まれた五つ子の内の一羽は、図書室前の廊下で飼っており、この他にも飼育舎に4羽を飼育している。

(2) 花いっぱい運動による環境整備活動

①全校で縦割り班活動の一つとして、環境



整備作業を行っている。草取りを中心に、落ち葉拾いや石拾いを朝行事の中に設定し、実施している。それぞれの学級の学級園に全員で、夏は「マリーゴールド」の移植、秋は「チューリップ」の球根を植えている。「種まきから種取りまでの世話」を位置付け、学級・園芸委員会・PTA環境委員会が協力して活動し、1年を通して、花壇だけでなく、たくさんプランターに植えられた花々が校舎内外に彩りを添えている。

②4～6年生の児童園芸委員により、苗床づくり、種まき、間引き、花壇への苗の移植、種取りを行い、季節ごとに花壇やプランターの管理をしている。

③全校で、学級園に様々な野菜や米等を植え、水やりや草取りなどの世話をしながら収穫し、生活科や理科、総合的な学習の時間に活用している。

(3) クリーン作戦

地域やPTA・子ども育成会と協力して、校庭や校区内のクリーン作戦を行っている。地域の活動では美しい町づくりを目指している。

これらの活動を通して、中庭が一年中きれいで、晴れの日には毎日ウサギが放し飼いになっている。中庭は子どもたちがほっとする憩いの空間となっている。低学年の教室では、朝や帰りのあいさつの中に、ウサギに向けたものもあり、ウサギたちを、東小の一員として扱っている。児童一人一人を本校の全教職員で見守り、活躍する場、発表する場の確保とともに、学級においての居場所づくりに努めている。児童はウサギがいるだけで、「ほっとする。」「なごむ。」などの気持ちになり、心の平静を保たせるのに役立っている。そんなウサギを活用して、道徳や生活科の授業を中心に「生命を尊重する心」を育みたいと考え、「ウサギの教室飼育」の実践を継続している。

2 ウサギの教室飼育の「悲しみ」と「喜び」

(1) 「悲しみ」を経験した平成21年度

前年度の反省をもとに、低・中学年のための4羽の飼育とし、後の3羽は保護者宅に引き取ってもらった。4羽のウサギを熱

中症や老衰で失った年でもあった。

① 1年生の教室で飼っていたウサギを中庭のケージの中で自由に遊ばせていたが、中でぐったりしているところを発見。すぐに動物病院に連れて行くが脱水症で夜中に死亡。(7月14日)

② 学校で飼っていたが、児童の家にもらわれていったウサギ⁰⁶⁻⁰³、調子が悪くなり、家庭で面倒を見られなくなったというので学校で再度引き取る。学校で親身に世話をし、一時元気になったように見えたが死亡。(7月26日)

③ 3年生が校舎2階廊下で飼っていたウサギで運動会終了後、前日からステイしていた児童の家から、様子がおかしいと言うので、学校ですぐに動物病院に連れて行く。(9月19日)

④ 飼育舎で飼っていたウサギが老衰で死亡。(10月16日)

どのウサギも児童たちとのかかわりが深く、体育館で死んだことを伝えた時、大きな悲しみに包まれ、多くの子どもたちが涙を流した。しかも4回も続いたことで、その悲しみは更に深かった。

しかし、しばらくしてから1年生の子どもたちが「教室にウサギがいなくて寂しい。もう一度ウサギを飼いたい。」と担任に訴えた。

⑤ 21年10月20日「学校だより」から

「ウサギとともに生きること」10月16日(金)、朝の委員会集会の後、飼育委員さんを中心に大切に世話をしてきた『ゼロ』が亡くなっているのを校務員さんが発見しました。まだ、体は温かく「(亡くなったのは)今朝だろうか」と話していました。前日は校務員さんが細かく切った野菜とエサを全部食べ、1年生担任が顔を拭いたり目薬を付けたり、ブラッシングをしながら話しかけると「クークー、フンフン」と答えていたそうです。ゼロは9歳位「人間でいうと90~100歳くらいかな」と獣医さんもおっしゃっていました。20分休みに体育館で「お別れの会」をすると悲しい雰囲気になりましたが、「ゼロは天国でラッキー(7月に亡くなったウサギ)と遊ぶよね!」と1年生がつぶやき、「そうだよ。よく頑張ってくれたよね」とのつぶやきが返りました。ウサギとともに生きるとはたくさん喜びをもらいます。しかし、別れる時にはとてつもない悲しみにも出会いま

す。一つ一つが子どもの心に染み込みます。《小さな命の輝き》を感じます。最後に「スター(9月に亡くなった)」の*お墓にある児童たちが書いた墓標の文を載せて天国のうさぎたちの幸せを祈りたいと思います。

*うさ田(スター)は元気でしたが、とっぜん体調がわるくなり、ちょっと時間がたち、なくなりました。とても悲しいです。でも『心』の中では生きています。(3年生)

(2)「喜び」を経験できた平成22年度

・マンションが多い校区では、自然環境に接する機会が少ないため、ウサギを育てながら学級園で花や野菜を育てる活動を、1・2年生の生活科で継続的に行うことにした。

・夏休みの飼育当番が、ある日職員室に「ウサギが巨大なうんちをしています。」と駆け込んできた。教員が慌てて飼育舎に向かうと、そこには真っ黒な5羽の赤ちゃんが生まれていた。

・夏休み後に、全校に紹介し、ウサギの赤ちゃんを抱く機会を設けた。連日子どもたちがウサギ小屋を訪れウサギの様子を見ては、「かわいい」を連発していた。

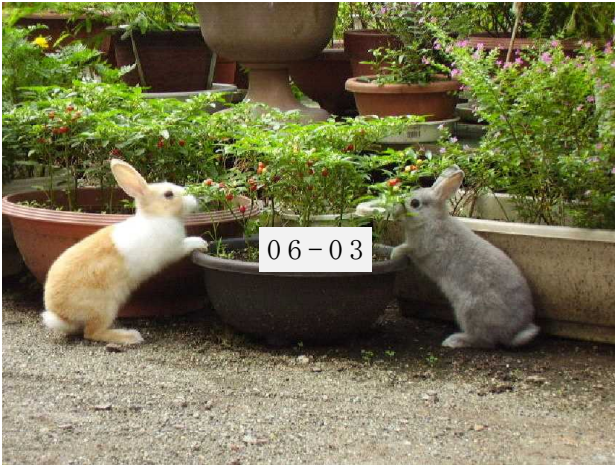
「飼いたいな。でもマンションだから無理ってお母さんに言われた。」という子どももいた。5羽のうちの4羽は里子に出したが、1羽は図書室で飼うことにし、全校から名前を募集した。今でも図書室前の廊下で子どもたちにかわいがられている。

(3)児童の作文から

私ははじめてウサギの赤ちゃんに会いました。

夏に生まれたので、ラッキー(*21年度に亡くなったウサギ)みたいに熱中症にならないか心配でした。まだ小さいので、膝の上にタオルを敷いて、その上にウサギを乗せてあげました。みんなウサギを見ると「かわいいね。」と声を出していました。段ボールの中にウサギちゃんを入れました。ウサギちゃん⁰⁶⁻⁰¹が早くとロールケーキみたいでした。男の子⁰⁶⁻⁰¹く順番でもめていたので、それほどかわいんだなと思いました。私が触るとちょこちょこ歩いて逃げていくので、私は「逃げないでよう。」と言ってしまいました。・・・後略(2年女子)

この作文を読むと、1年生の時に教室で



飼っていたウサギの死も忘れていない。しかし、新しい命の誕生を素直に喜んでいる。2年間の動物飼育から多くのことを学んでくれたと思う。

3 児童アンケート

(1) 全校158名から

Q1：ウサギが近くにいて、よかったと思うことはありますか？

- ・小学校に入ってから、ウサギが好きになりました。(1年)
- ・少し見るだけでも、優しい気持ちになれる。
- ・授業中に後ろを向くと、ウサギがいて勉強する気持ちになる。(2年)
- ・ウサギの成長を見ることができてよかった。
- ・ウサギがいるだけで癒される。心が穏やかになる。
- ・マンションなので動物とのふれあいがなく、ウサギが校内にいてくれてとても楽しい気持ちになる。(5年)
- ・元気がない時に元気にしてくれる。私たちの友だちみたいに楽しく遊べる。(6年)

Q2：赤ちゃんウサギの五つ子を抱いた時、どう思いましたか？

- ・ちっちゃくて毛がふわふわしていてかわいい。
- ・走るが遅くておもしろかった。(1年)
- ・温かくってとても小さく、飼ってみたいと思った。(2年)
- ・自分のクラスでも飼いたい。(4年)

Q3：ウサギの飼ってみて思ったことや世話をしたことは？

- ・水やエサをあげるのがたいへんでした。
- ・世話をした最初はいやだと思っていましたが、だんだんやりたくなかった。

- ・ココアは触ると温かかった。
- ・うんちをいっぱいするのがわかった。(1年)
- ・掃除はたいへんだけど、トラが喜んでくれるとうれしい。
- ・東小は人数が少ないから、ウサギがいないと寂しい。・ウサギを飼ってクラス全体が明るくなった。(2年)

Q4：これからも、校舎の中でウサギを飼っていきたいですか？

(・はい：154名、・いいえ：4名)

(2) 考察

①子どもたちの多くは、ウサギが好きである。飼うための世話のたいへんさにより、身近にウサギがいてくれる状態を望んでいる。

②子どもたちはウサギを飼い、身近に置くことで、多くの気づきを持つとともに、気持ちが和らぎ、落ち着いた気持ちになる。

(3) 1年生の子どもたちの気づき

- ①日向に行くと床にぼったり張り付くのがかわいいです。
- ②触るとふわふわします。
- ③ちり取りが大好きです。いつも掃除をしているとちり取りの上に乗ります。
- ④心臓の音がとても早いです。僕は「どっくんどっくん」だけど、ウサギは「どっどっどっどっ」です。
- ⑤えさをもぐもぐ食べます。水を飲む時は、鼻がぴよこぴよこ動いて、そこがかわいいです。
- ⑥元気もりもりで、近づくとすごく走ってみんな追いつけないです。
- ⑦お世話をしていたら、私の手をなめました。
- ⑧自分の前足で顔をごしごし洗ったり、お昼になったら、ぐうぐう寝たりします。

4 獣医師との連携





群馬県では「動物ふれあい教室事業」を毎年実施している。これは、子どもたちが動物とのふれあいを通して、動物の生態や正しい飼い方等を体験し、動物愛護精神の啓発を図るとともに、動物感染防止策を講じ、安全で快適に学べる保育、教育の場を提供することを目的としたものである。

各小中学校ごとに担当獣医師が1名おり、飼育動物の治療や相談等の以下の事業を行ってくれる。

(1) ふれあい動物教室の実施

①飼育委員に向けて

ウサギ小屋での飼育状況を確認後、飼育委員を集めてエサの与え方と留意点、ウサギ小屋の衛生管理、ウサギの特質等を懇切・丁寧に指導してもらった。今後の飼育委員会児童の活動に非常に役立つ内容だった。

②新1年生に向けて

体育館において、1年生全体に、子どもたちからあがった質問事項に対して説明してもらった。「ウサギはなぜぴょんぴょんはねるのですか？」等、子どもらしい内容の質問に対しても紙芝居やレントゲン写真を見せてわかりやすく説明してくれた。その後、三人の先生の班に分かれて、ウサギを抱かせてもらったり、ウサギの心音と自分の心音を聞かせてもらった。子どもたちは実際にウサギに触れることができたことで愛着を持ち、はやく身近な教室で飼いたくなくなったようだ。

(2) 日常の診察・相談

ウサギに限らず、鳥等の飼育動物を診察してくれる。また去勢手術や寄生虫検査も実施してくれる。飼育動物の具合が悪くなったときに、親切に診療してくれる。診療時間外で診察してもらったり、入院させて預かってもらったりした。

ウサギや飼育動物の調子が悪くなったり、何かあった時にこのように対応してもらえるので、学校獣医師は学校としては本当に助かる心強い存在である。

Ⅱ ウサギの校舎内飼育の成果と課題

1 成果

- (1) ウサギの教室内飼育と栽培活動を通して、生活科の具体的な視点「(キ)身近な自然との触れ合い」を道徳の時間と関連させながら、推進で きることができた。
- (2) 自分たちで当番を決め、エサをやったり、ケージを掃除するなどにより、児童のウサギへの愛着を深めることができた。
- (3) ウサギと触れ合ったり、見ることによって「安らぎ」を感じる児童が増えた。
- (4) 常に教室内にウサギがいることによって、ウサギの成長の様子を観察することができた。また、放し飼いのウサギを見て、人参やキャベツだけでなく、中庭にあるパンジーやマリーゴールドの花や大根の葉を食べることがわかった。他にも暑い時には穴を掘って体を冷やしている様子を見たりして、様々な「気づき」が児童の中に生まれた。
- (5) ウサギの突然の死は児童にとって衝撃的であった。そのことを現実として受け止め、悲しみの気持ちを「死んだウサギ宛の手紙」や「墓標」に表すことができた。その後も墓前に花を手向けるなど、身近なものが亡くなることの悲しさを体感させることができた。
- (6) ウサギの死を目前にし、身近なものが死ぬことによって大きな悲しみを経験し、それを乗り越えることができた。また、生命あるものを大切にすることを育むことができた。
- (7) ウッドリターの代わりに、シュレッターから出た紙くずを利用したり、ウサギの糞と落ち葉を混ぜて腐葉土を作った。その他にも、給食室から出る野菜くずをエサに混ぜて与えたりし、環境問題にも取り組むことができた。
- (8) 8月に生まれた5羽の赤ちゃんウサギを全校に紹介し、その誕生を全校で祝えた。実際に抱かせたことで、ウサギをよりかわいいと感じる児童が増え、赤ちゃんウサギの名前を募集したら、全校の9割の児童からの応募があった。また、生後2ヶ月ほどで親と同じぐらいの体格に

なるウサギの特性も理解させることができた。

- (9) 低学年の「教室内飼育」の導入として、獣医師による「動物ふれあい教室」を位置づけることにより、児童の意欲関心を高めることができた。また、ウサギの特性や扱い方の指導を受けることにより、児童の飼育活動実施に向けての安心感を得られた。

2 課題

- (1) 単にウサギを教室で飼うだけでなく、生活科や道徳や総合的な学習の時間と関連させ、年間計画に位置づけることが必要である。ウサギの飼育や植物の栽培についても、1・2年生の発達段階に応じた扱いを検討する必要がある。
- (2) ウサギの死をきっかけとして、生命の尊さをどのように感じさせ、生命を大切にすることを持たせるか、事前に職員全員の共通理解が必要である。
- (3) 土・日曜日、長期休業日のウサギのえさやりをどのように実施していくか。
- ① 職員の当番は全職員で順番で担当する日もあるが、一部職員に負担をかけている部分がある。
- ② 児童の家庭へのステイについて
暑さに弱いウサギであるため、ウサギ飼育に慣れていない家庭に任すことに不安がある。また、ステイ希望が多いウサギはステイの期間が短いため、ウサギが目まぐるしい環境変化に対応できず、学校に帰ってから不安定な状態になってしまった。ウサギの毛が生え替わる時に抜け毛が多いため、ステイを引き受けてくれる家庭がない。
- (4) 動物アレルギーの子どもの扱い
- ① 入学前に「動物アレルギー」についての

アンケート実施。

- ② 動物に直接触れないように、教室内の座席位置、「ウサギ当番」等に対して配慮しつつ、家庭と連絡を取り合いながら、対応している。

(5) 夏季の温度管理

ホーランドロップ種は暑さに弱く、気温が30度以上で10分以上炎天下にいと熱中症で死んでしまうため、ウサギ小屋への扇風機の設置や日陰で風通しのよいウサギ小屋の環境作りが必要である。

- (6) 高学年は、休み時間や放課後に委員会活動や体操演技会、水泳記録会、陸上記録会、金管バンド、代表委員会等の仕事や練習が入るため、教室内飼育は難しい。

結びに

ウサギに限らず、接触する期間が長い身近な動物はいとおしくかわいく感じる。本校の「ウサギの校舎内飼育」が本研究大会の「知の創造」に結びついているとは断言できないが、ウサギに安らぎを感じ、児童の情緒の安定に大きく寄与していることは言える。落ち着いた雰囲気の中で安心して学習できることは、「知の創造」に向けた学習環境整備の一つと考える。様々な課題もあるが、この飼育活動を通して、これからも生命の大切さを継続して教えていきたいと思っている。

そのためには、「ウサギの教室内飼育」は学校だけで活動しては継続できない。学校としてできる限りのことをやりながら、専門家としての獣医師の指示と助言を受け、地域・家庭と協力していくことが大切である。

(群馬県高崎市立東小学校教頭)

